



キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

シリーズ・改革者たち ⑮

筑波大学附属坂戸高校 前校長

服部次郎

初年度開設校のリーダーとして総合学科発展に尽力

筑波大学附属坂戸高校は、筑波大学に3つある附属高校の一つだ。

いずれも普通科の進学校として著名な筑波大学附属高校、同駒場高校と異なり、

93年までは無名の専門学科高校であった。

だが、時代状況の変化による学校衰退のなかでもがくうち、

総合学科改編に光明を見出したことで、その名は全国に広まった。

埼玉県の郊外、東京ドーム1.5個分という広大な敷地に、

農場、工場、豚舎に駝鳥舎まであるのどかな高校が、

いかにして日本中から注目される改革を成し遂げたのか。

期せずして改革の指揮を執り、時代の寵児となった教員の視点を通じ、

その実情をあらためて眺めてみる。

取材・文／堀水潤一 撮影／渡邊力

理念をどう現実 落としこむか



はっとり・じろう ● 1943年東京都生まれ。東京教育大学文学部卒業後、67年に東京教育大学(現筑波大学)附属坂戸高校に赴任。96年同校副校長、02年同校校長に就任。06年に退職し、現在、東京女子体育大学、同短期大学教授。全国国立大学附属学校連盟副校団長会会長、全国総合学科高等学校長協会副理事長、全国高等学校長協会理事などを歴任。総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議(文部省初等中等教育局)、横浜市立高等学校教育改革推進会議ほか委員経験多数。



94年度に7校でスタートして以来、総合学科の歴史は12年を刻み、今やその数は286校にのぼっている(05年度時点)。そのうち多くの高校が、学科改編に際して手本としたのが、初年度開設校の一つ、筑波大学附属坂戸高校(以下、筑坂と表記)だ。そして、総合学科の意義や成果について、飽くことなくエネルギーを語り続けてきたのが、同校前校長の服部次郎である。

ただ、こう書く筑坂の改革は総合学科の理想を具現化した、後進の範たるスマートな改革であつたかのような印象を与えるかもしれない。だが内実は、目前の危機を回避すべくもがいた泥臭い改革であり、服部自身、それまで総合学科の理念はおろか、教育改革の流れに対しても無知・無関心なごく普通の教員であつた。

改編にあつては、伝統ある専門学科の暖簾を下ろし、得体の知らない「つまみぐい学科」に転換することに反対意見が百出した。結果として、教員の採決により学科改編は決定されるが、それは、総合学科の理念に共鳴したというよりも、学校が衰退するなか、文部省(当時)の支援を見込んだ打算的な判断ともいえた。改革は理念ありきか、それとも現実的課題に即して行うべきか。言い換えれば、原理原則を貫くか、柔軟性をもって対処するか。学校の多様化を旗印に教育改革の波が広がるなか、筑坂の実情は、改革の方法論について示唆を与えてくれる。

今春から東京女子体育大学・同短期大学教授として新しい人生を歩んでいる服部だが、それまでの39年間は一貫して筑坂に勤務した。学生時代の服部は演劇青年であり、演出家か照明家志望であつたという。夢はあえなく挫折したが、筑坂赴任以来、管理職となるまでの20余年間、演劇部の顧問として情熱を注いだ。「汗と涙と根性」とが合言葉の厳しい部だ。コンクールの上位を狙っては休暇返上で汗と涙を流し、常に県のトップレベルの実力を維持した。授業や生徒指導などの校務を疎かにすること

はなかつたが、本音では「本業4・部活動6」という力の入れ具合。当時の教育観は「常に生徒とあらん」であり、学校運営や教育改革などには関心が及ばなかつた。

熱意の源は当然「芝居が好きだから」であるが、専門学科高校独特の「普通科の教員は脇役」という事情も関係していた。当時の筑坂は、農業・機械・家政・生活科で構成され、予算や人事を含め、学科同士が何かと覇を競い合う「学科王国」であつたという。自然、学校経営は各学科のリーダー的な教員を軸に進められ、社会科教員である服部は蚊帳の外に置かれていた。常に現場の視点でモノを考え、管理職に何かと盾突くことは多かつたが、それは野党の野次のようなもので、表舞台に立ち、大局的な見地から学校経営に参加する意識などまるでなかつた。無用な学対立は生産的ではないと感じつつも、自分は目の前の生徒にひたすら接していればよく、そうした状況に不満も持たなかつた。

そんな風に年を重ねるなか、専門学科をとりまく状況は時代とともに変化していった。長年、農業後継者や中堅技術者を地域社会に送り出し、一定の役割・存在感を保ってきた筑坂だが、高度成長期以降、急速に都市化が進むなかで農業科の志願者は減り、また、偏差値輪切りの受験競争が過熱するなかで専門学科の地盤沈下は避けられないものになってきた。不本意入学者が増え、学校は荒れはじめ、さらに、少子化なども手伝い、生徒募集がままならなくなってくる。服部にしてみれば、特に昭和から平成に変わる頃が困難校の状況の最たる時期という印象を持っている。

もちろん、手をこまねいていたわけではない。各教員はそれぞれの立場で役割を果たしていたし、学校全体としても研究開発学校の指定(88〜90年度)を受けるなどして活性化を図ってきた。しかし起死回生の起爆剤とはなりえなかつた。学科間の壁は学校一丸の改革には妨げであつたし、長く低迷することで、国立大学附属校にも関わらず、学校に誇りをもつ教員は少なかつた。



生徒を通じて 自分の仕事の 意味を考える

廃校も現実味を帯びるなか 学校を二分した議論が続く

90年秋、中村副校長(当時)が、校舎の改築を含む概算要求を筑波大学当局に提出したところ、「将来構想を示せない附属校に余計な予算はつけられない」と拒絶される。随分以前から農業科を中心に生徒募集が困難になってはいたが、「ここにきてようやく何とかせねばという機運が学校に高まり、将来計画推進委員会が組織された。委員長には、学科間の駆け引きによる産物でもあったようだが、服部が任命された。うるさい奴がなったと煙たがる古参教員もいたが、担ぎ出された本人も当時をこう振り返る。

「それまでは学科王国のなかで個人主義の城に閉じこもっていた独善的な教師だった。学校運営とか学校改革は無縁なことと思っていた。それが、学校が衰退し、ほっとくわけにもいかず、脇からあれこれ口を出しているうち、真ん中に押し出されてしまった」

副校長の「総合職業高校の特性を活かした総合選択制高校に改編する」という方針のもと、委員会では会議が繰り返され、県内の先進校を視察して回った。演劇部に顔を出す時間が減った服部は部員に責められたが、学校改革の面白さも感じ始めていた。そして91年秋、従来の4学科を科学技術科という1つの学科に括り、そのなかに国際産業系・生物資源系・機械技術系・家政科学系という4つの系を作る案がまとめられる。系をまたいでの科目選択は想定していないものの、現有教員と施設を活かし、また学科間の無用な対立を煽らないよう工夫した改革案であった。

92年4月、県教育局の前指導部長であり、文部省の教科調査官を務めたこともある大物、久保田旺校長が着任し、当時でいう「総合的な新学科」の概念が筑坂にもたらされたことで事態は変化し始めた。久保田校長は科学技術科構想に触れるや、「学科を超え

た授業選択ができない点で、文部省の進める総合的な新学科とは似て非なるもの」と述べ、方針を転換するよう示唆を与えた。

服部は、久保田のいう総合的な新学科の理念が、大多数の教員同様、にわかには理解できなかった。「家政科の生徒が旋盤をし、機械科の生徒が裁縫をするというのか」。その一方で、科学技術科構想は専門学科の教員に配慮した、これまでの(学科)を念頭に変えただけのごまかしの改革案という認識もあったわけで、それまでの準備を否定されたショックよりも、学科の壁を崩すという発想と、久保田校長という後ろ盾がついたことに痛快さも感じた。

とはいうものの、動き始めていた改革はすぐには軌道修正されなかった。近隣中学には科学技術科に変わることを広報していたし、科学技術科構想と文部省の新学科構想は同じようなものと思いついていた教員も大勢いた。それほど教育界の動きから取り残されていた。服部は、久保田校長の口から当然のように出てくる臨教審、中教審などのワードを慌てて勉強し始めた。

「教育改革の流れを知るにつけ、古いものにしがみ付いていても仕方がないという気持ちが生じてきた。何より、こうした教育界の動きも知らず、自分たちがいかにぬるま湯に浸っていたかが分かった。総合学科の本質はまだ理解できる段階ではなかったが、この流れにのらねばと感じた」と当時の心境の変化を語る。

92年10月、改革の方針に決断が迫られることになった。文部省当局者から改めて「科学技術科構想は総合学科とは違う。筑坂が専門学科を踏襲した科学技術科で行くならそれでもいい。ただ、その場合、総合学科の糸列と混同するので、糸列という呼称を使うのは困る」といわれたのだ。ここに、専門学科の体制を固守するか、総合学科に賭けるかという二者択一の選択が突き付けられた。

校内を二分した議論は委員会を主な舞台として半月間にわたり続けられた。専門学科にこだわる側の主張はこうだ。自由な選択による「つまみ食い学習」は系統性を失い、専門能力の育



成を不可能にする。これまで築いてきた進路先の信用も失いかねない。また、自由な選択は安易に流れるし、大学進学に有利な普通科目ばかり選択されれば専門教育の切捨てにつながる。こうした意見は主として地道に専門教育に携わってきた専門教科の教員に多かった。

一方、総合学科推進派の論拠は、学科王国という閉鎖的な体制から普通科・職業科を総合する学科という考えは悪くない。生徒の個性を尊重し生き生きと学ぶ喜びを体験させるという理念にも共感するなど、けれどもっとも多い声は、このまま専門学科に固執しても発展は見込めない。ならば文部省の流れに乗る方が得策である、という現実主義的な意見だった。

92年10月29日。結論をだすべく教官会議が開かれる。すでに大勢は総合学科改編に傾きかけていたが、会議は長時間にわたった。そして、意見も出尽くした頃、専門学科存続を最後まで主張していた教員から、けじめをつけようと採決の動議があがる。結果、約8割の賛成をもって総合学科改編が決定された。

服部は言う。「自分を含め、推進派最大の賛成理由は文部省の支援が見込めるからであり、総合学科自体に信頼を置いていたのではない。その点で論拠は薄く反対派の意見にいちいち揺れていた」。このとき総合学科の弱点を洗い出したこと、加えて、教員の自主性によるボトムアップの意思決定がなされたことは、その後続く現実的で自主的な改革を推し進める大きな助けとなった。反対派の教員も、決定後は率先して準備に取り組んでくれた。

試行錯誤を繰り返しながら、

学校一丸となり改革を進める

前例のない総合学科改編の準備は、教育課程の編成、自由選

択制時間割システムの開発、教務内規・学習規程の制定、学務情報管理システムの開発、生徒募集と入試改善、年次会指導、原則履修科目「産業社会と人間」「情報基礎」「課題研究」の科目開発、生徒指導、進路指導など多岐にわたった。

「これまでの教員は生徒に教えることが主なる立場であったが、総合学科では、生徒の主體的な学習を支援することが重要な立場になる。教えることとやらせることを比べれば、後者の方がずっと大変で難しい」と服部。

しかも、総合学科は各学校の実情にあわせた独自のカリキュラムを作ることが前提だ。行政当局からはわずかな指針と抽象的な理念が示されるばかりでマニュアルは存在しない。しかし、それが教員の自主性を促すことにつながった。なかでも服部は「産業社会と人間」の科目開発が楽しくて仕方がなかったという。

「異なる教科の教員と一つの科目を開発する経験は初めてだった。公民科・工業科・保健体育科・国語科・地歴科・家庭科・農業科から9人が集まり、新しい科目を立ち上げた。他教科の教員の独特な発想に触発され、視野が広がった」

改編の苦労は並大抵のものでなく、教職員の努力に頭が下がったが、一度決定したことを実行に移すのは、「汗と涙と根性」が好きな服部の得意とするところ。余談だが、この頃の3年間、予餞会で「教員芝居」を上演することが決まり、その指導が服部に託されることになった。こと演劇になると余興では済まされない。本番までの数カ月間、服部の熱のこもった演技指導は勤務時間後も夜遅くまで続き、結果、生徒に大好評を博したばかりでなく、学校中の教員と信頼関係を深めることができた。改革の推進に少なからず役立つたという。

こうして94年4月、総合学科1期生が誕生する。文部省を通じたマスコミの宣伝効果もあり、志願倍率は跳ね上がった。新入生ばかりに光が当たり、前体制下にある上級生には気の毒な思



いをさせたが、困難校の状況を呈していた学校は蘇った。

ただし、万事うまくいくかに見えた改編も、生徒指導の面からほころびを見せる。初年度こそ問題行動は目立たなかったが、1期生が2年次に進級し選択科目が多くなると、その時間帯を抜け出し、学校周辺などで喫煙する、いわゆる「中抜け」の問題が目立ってきたのだ。3年目には喫煙が原因で消防車まで出動する小火事件が起ころ。その後も問題行動が頻発。総合学科は何でもありか「これでは以前よりひどい」という声が多くなってきた。総合学科には、必要以上に管理をせず卒業させやすくするという困難校対策の側面もある。改編に際して、脱管理主義的な生徒指導の理想を掲げた服部だが、その部分の間違いを認めざるを得なかった。

「確立されていない個に、開放されたシステムを与えたことは野放しと同じだった。本来、確立されていない個には閉ざされたシステム(HR単位での授業など)がふさわしいのであろうが、総合学科の実験校とあつてはシステムを変えるわけにはいかない。だとすれば生徒を変えるしかない。生徒に、自己選択・自己管理・自己責任の原則を徹底するしかないと考えようになった」

こうして、文部省の規定通りに甘くしていた教務内規・学習規程を98年度より見直した。総合学科では自己管理できない生徒は生きていけないことを教えこむことにしたのだ。具体的には、「1分足りなくても欠課」「1点足りなくても単位不認定」「1単位足りなくても卒業させない」ことを申し合わせた。自律あつての総合学科。生徒指導面ではなく学習指導面で緊張感を与えようと試みた。合言葉は「4年次生を出すことを恐れるな」

その結果、2期生から5人の4年次生が生じる。当初は、問題行動を重ねてきた彼らが下級生に悪影響を与えるのでは、という不安もあった。けれど、実際は気の毒なくらい大人しくなり、彼らなりに苦勞して卒業していった。従来の体制であれば進級できずに退学していたであろう生徒たち。校長室でささやかに

われた卒業式に、彼らは照れくさそうにしていたが、母親のひとりが感極まると、またたくまに周囲に伝染し、それは感動的な式となった。専門学科時代、多くの退学者を出してきた服部は、単位制を原則とした総合学科の素晴らしい一面を実感した。

第二次学校改革に着手

進学のできる総合学科を目指して

総合学科改編が成功し、生徒の質が変化するに従い、新たな課題が生じるようになった。進路保障の問題である。高卒の労働市場は狭まり、進学希望者の割合が増えてきた。専門教育を特色とする筑坂型の総合学科でも、現実的な対応として就職から進学を目標とした教育に切り替える必要が生じてきた。ましてや附属校として親大学への進学もままならないようでは世間が認めてくれない。事実、改編により知名度を上げたものの、すでに00年あたりから志願倍率にかげりが見えてきた。国立大学の法人化も近づき、再び学校存続の危機が迫ってきたのだ。ただし、総合学科である以上、効率を重視した普通科的な進学指導を行うのでは意味がない。「多様な価値観のなかで学ぶ喜びと進学実績を両立させること。これが新たな課題となった」と服部は言う。突破口は課題研究(現卒業研究)だ。自ら課題を見つけ、調べ、発表する課題研究の成果を携えてAO入試や推薦入試に挑む。これこそ、総合学科における進学の王道と服部は考える。科目開設当初は、自ら学び考える力にほど遠い生徒ばかりだったが、先輩の発表に触発され、知の蓄積が進んだことや、指導教官の力量向上もあり、「ここ」にきて優秀な論文が生み出されるようになってきた。

02年4月。服部はこれまでの功績を評価され、筑坂の校長に大抜擢される(同時に筑波大学の教授に就任)。通常、附属高校の大



日々は いっかで過ぎました 人生の貴重な宝

校長は親大学の教授が勤める。久保田校長のような例外はあったが、叩き上げの教員が校長になるなど前代未聞のことだった。服部は身が引き締まった。そして、副校長時代から検討を重ねてきた、進学指導にシフトする第二次学校改革を、03年度の新学期指導要領実施に合わせてスタートさせた。柱は系列の改革だ。

従来の自由選択制のカリキュラムでは、農学部を目指す生徒が生物や化学を選択しなかったり、工学部志望者が数学や物理を履修しないこともあった。また、英語の必修が保障されない状況では推薦入試といえども難しい。こうした自由度は、困難校的狀況下では意味を持っていたが、進学を念頭におく場合は非効率だ。この弊害を解消するため、「開放型自由選択制」をやめ、系列に縛りを入れた「系列選択制」に変更。しかも、専門学科学的色彩を強く残していた系列を一新し、「工学システム・情報科学系列」「人文社会・コミュニケーション系列」など、筑波大学の学群・学類に対応した新系列に改編した。また、英語Ⅱまでを必修にし、「進学のできる総合学科」をうたった。

これに対しては「総合学科の理念に反するのでは？」と、校長会などで批判もされたが、服部はこう持論を説いた。

「総合学科は、目の前の生徒にいかに対応するかという教育システム。確かに系列に縛りを入れないのが原則かもしれないが、9年の実践を経て新しい形を提案した。農場、工場、実習室など坂戸の恵まれた教育資源を触媒に、問題意識を育み、それをモチベーションとして大学に進学する。世間にはまだない、多様な選択科目を開設する総合学科の進学名門校を目指している」

系列の見直しに加えて、三学期制への回帰、キャリア教育科目（産業理解・起業基礎）の開発など、新たな現実的課題に対処すべく、新しい挑戦も始めていった。

それから3年。系列改編後の1期生にあたる05年度の卒業生からは、筑波大学5人を含む、国公立大学11人、私立大学59人

が生まれた。卒業生の半数近くが大学に進学する高校になったのだ。総合学科の進学校として出足は好調だ。服部はその結果を見ると同時に筑坂を去った。続きは後進に託してきた。もちろん、今後新たな課題や状況の変化が生じたら、その都度、違うやり方で学校を作り直していけばいい。

服部は言う。「昔と今では情報量が格段に違う。環境が変わるスピードも速い。だから生徒の性質や思考が急速に変化していくのは当然だ。けれど教師だって同じ時代を生きているわけで、生徒と教師の関係性は昔も今も相対的には変わらないはず。なのに、感受性の低い、観察力のない教師は、生徒の変化に気が付かず、一方で自分がかつてイメージした教師像から離れることができず、一方で自分がかつてイメージした教師像から離れることができる。そうして隙間は広がり、学校は機能不全に陥ってしまう」

そうならないためには、変化の兆しを感じたら、現実在即していち早く対応しなくてはならない。理念は後付けでも構わない。

服部は39年間の筑坂生活において、生徒とのかかわりのなかで生きている現場教員の立場から、一転、広い視野から教育のあり方を考える管理職の立場になった。前後半ではどちらが自分らしいかといえ、どちらもとしか答えようがない。そうした、教育の両面に携われたことに幸せを感じている。

「教育とは生徒とともに生きること。前半はともかく、管理職となってからは生徒と直接触れあう機会は少なくなった。それでも自分のしていることが意味あることかどうかは生徒に表れる。生徒の姿を眺めることで、自分を振り返ることができた」

筑坂の生徒は今、目標を探しながら、生き生きと伸び伸びと学んでいる。「任期中にできることはすべてした。やり残したことは何もない」と、服部は満足気に言った。(敬称略)

筑波大学附属坂戸高校
1946年設立。全日制総合学科。
1~3年各4クラス。生徒数/482人。
埼玉県坂戸市千代田1-24-1
TEL 049-281-1541 URL <http://www.sakado-s.tsukuba.ac.jp>